南方熊楠全集

1

平凡社

南方熊楠全集（全一〇巻）
第一巻 十二支考
定価 二八〇〇〇年
昭和四六年 二月二〇日 初版第1刷発行
昭和四七年 三月一〇日 初版第5刷発行
著者 南方熊楠
発行者 下中邦彦
発行所 株式会社 平凡社
東京都千代田区四番町四番地
郵便番号 一〇二
電話 (二六五)〇四五一
振替 東京 二九六三九
印刷 東洋印刷株式会社
製本 株式会社石津製本所

南方熊楠全集の刊行にあたって

南方熊楠は日本における最初で、最後のエンサイクロペディストだといえる。南方は十九世紀の最終の時代をイギリスで過ごした。イギリスに渡るまえ、かれはアメリカに五年以上滞在したが、これはかれの思想と学問に直接の影響はおよぼさなかったらしい。しかしアメリカにおける五年間の生活は、後年のヨーロッパ、とくにイギリスの理解に対する準備時代であったと見てよい。十九世紀、あるいはいわゆるヴィクトリア時代は、イギリスの最盛期であった。この時代のイギリスの社会、経済、政治、軍事についてはここで語るまでもない。最盛期の「大英帝国」が南方にあたえた刺戟がいかに大きなものであったかは、かれの文章の随所に見出されるが、ここではかれの思想と学問に直接の影響をおよぼした点を、すこしばかり考えてみたい。

十九世紀イギリスの思想界を支配していたものは、合理主義と自由主義と進化論であった。この時代の著名な学者、思想家の名前を多くここでならべる必要はないが、代表的な人としてチャールズ・ダーウィン、ジョン・スチュアート・ミル、ハーバート・スペンサー、トマス・ヘンリ・ハックスリ、ウィリアム・ロバートソン・スミスの五人を挙げてもよいであろう。南方がイギリスに渡ったのは一八九二年であるから、この五人のうちスペンサー、ハックスリ、ロバートソン・スミスはまだ存命中であったが、南方がロンドンに住むようになってから数年のうちにスミスとハックスリは相ついでなくなり、スペンサーは南方のイギリス滞在中は存生していた。おそらく南方は当時すでに老境にはいっていたこれらの大家に会う機会はなかったと思われるが、かれはイギリスや大陸諸国の思想家や学者の著書

を熱心に読みあさり、他方では当時第一線で活躍中の人々とは直接に接触していた。南方の著述をよく読むと、かれの思想、人生観がこの時代の合理主義と自由主義によって貫かれていることがわかる。南方の思想的背景を知るためには、このように十九世紀イギリスの思想、学問を知る必要があり、そのためにはダーウィンはさておいてJ・S・ミル、H・スペンサー、T・H・ハックスリ、W・R・スミスについて語ることが、いちばん近道であろう。

ミルは経済学説史上で不朽の名をとどめたが、かれが単なる経済学者でなかったこと、自然科学に関しても深い理解をもち、社会科学においては非常に広い汎囲にわたる学者であったことは、その著作のおもなものをならべるだけでもわかる。もっともよく知られている「経済学原理」Principles of Political Economy, 1848 以外に、「文明論」Civilization, 1836,「論理学体系」A System of Logic, 1843,「政治学」Essay on Government, 1820 などがあり、また文学論としてコルリッジ、カーライル、ゲーテその他に関する評論なども書いている。スペンサーが十九世紀最大の学者の一人であったことを疑う人はあるまい。かれは自然科学者として出発し、社会科学のほとんどあらゆる分野にわたって業績を残した十九世紀の巨人の一人であった。社会学、人類学におけるかれの直接的影響は現在ではきわめて限定されたものに過ぎないが、西洋におけるその間接的影響は現在でもまだ小さいものとはいえない。同じことはハックスリについてもいえるであろう。現代ではトマス・ハックスリよりもその孫であるジュリアン・ハックスリのほうがより知られているが、十九世紀におけるトマス・ハックスリは二十世紀におけるジュリアン・ハックスリよりもはるかに大きな影響力をもっていた。トマス・ハックスリは解剖学者として出発した。一八五九年に出版されたダーウィンの「種の起源」は近代における最大の科学的貢献で、その社会科学にあたえた影響もすこぶる大きく、深いものがあった。生物学者としてのハックスリがダーウィンの圧倒的影響下にあったことはいうまでもない。かれはダーウィン説に基礎をおいて進化論を発生学や古生物学へ適用しただけではなく、合理主義的考え方を各方面に普及することに努力し、中世的な考え方、ものの見方の排除に大きな貢献をした。ロバートソン・スミスは人類学者とし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ても有名であるが、そのほか物理学、言語学、考古学、宗教学などの広い領域で活躍し、またエンサイクロペディアの傑作といわれる「エンサイクロペディア・ブリタニカ」第九版の編集者として名声を馳せた。

以上に述べた人たちは、十九世紀イギリスの知識人の典型であり、理想像でもあったといえよう。明治の軽薄な西洋化の風潮と因襲的な古い社会のうちに育ち、当時の新興国アメリカの粗雑さにあきたらなかった南方が、ヴィクトリア朝イギリスに強く心を引かれたのは当然である。そのうえ、南方は右に述べた当時の「大型」学者たちに個人的な親近感を抱いたことも容易に想像できる。

これらの高名な学者たちが天賦の才能に恵まれていたこと、たとえばミルは三歳でギリシア語、八歳でラテン語を学んだことや超人的な努力家であったこと、ロバートソン・スミスは「ブリタニカ」第九版の原稿を全部読んだことなどを、南方はよく知っていたはずである。しかしながら天賦の才能と努力においては、南方も当時のイギリスの第一級の人物に決して劣るものではなく、かれ自身この点を自覚していたにちがいない。ただ異るところは、絶頂期のイギリスの自由な、恵まれた社会と当時の後進国日本の社会との間のどうすることもできない相違であった。こういうところに、天才南方の奇矯な言動の説明を見出すことができよう。南方は「淵鑑類函」四百五十巻を暗記していたとか、十八箇国語を知っていたとかいうことである。このような話は「伝説」ではないであろう。南方の英語ひとつをとつて見ても、すくなくともその英文論考は、かれの友人のイギリスの著名な学者、文人の校閲を経たものとしても、非常に立派なものであるし、かれの文章の随所に現われている古今東西の文献による博引旁証には驚歎のほかはない。南方が理想としたのは Everything about something; something about everything. という十九世紀のエンサイクロペディストではなかっただろうか。

わたくし自身が三十年以上もまえにふと読んだ南方の文章にひかれて、その後かれの文章を読みあさり、乾元社版「南方熊楠全集」の出版にも多少の関係をもつことになったのには、もう一つ、二つの理由があった。南方に対する

わたくしの最初の興味は、その博引旁証と型破りの痛快な文章にあった。その内容も文体も破格というか、奇矯というか、遠慮会釈がないというか、とにかくおそろしく個性をむき出しにした文章である。しかし晩年の田辺時代の文章を読んだ時には、これとはまったく違ったあふれるようなpathosに打たれざるをえなかった。この天衣無縫の人もまたすこぶる人間くさい人間であることを知ることができた。こういう意味で南方の晩年の文章を、わたくしはえがたいhuman documentだと思っている。

近代日本が生んだ「巨人」南方熊楠の思想と学問、またその人間について知りたいと思う人もすくなくないであろう。しかし体系的著述がないこと、あまりに博引旁証であること、友人への書簡の形をとったものが多いこと、英文の論文もすくなくないことなどで、南方の思想と学問の全貌を把握することは決して容易ではない。しかし読むにしたがって、その特異な文体は人をひきつけずにはおかない。またその鋭い発想法は、ものの見方に対して貴重な示唆をあたえるにちがいない。

旧版「全集」の「上梓のいきさつ」という文章のうちで渋沢敬三さんは、この大型学者について深い敬意と愛情の感想を語っている。渋沢さんはこの「全集」の編集、出版に参加した人々の名をすべて挙げられ、わたくし自身も末席につらなっている。しかし旧版が戦争直後のあの混乱と経済的困難のうちで出版されたのは、ほとんど渋沢さんと岡田桑三さんの熱意と努力によるものであることは、当時の事情を知るものにとっては明かな事実である。当時「全集」に関係のあった一人としてわたくしなどは、協力らしい協力もできなかったことを今でも後悔にたえないでいる。当時の事情からいって、実際のところ、あれ以上のものをつくることは困難であった。当時の渋沢さんとしても出版資金の調達に、われわれが知らないような苦心をされたであろうし、編集や校正に当たった方々も大変であったにちがいない。

こんどの平凡社版の出版にあたって編集上の協力依頼を受けた時に、わたくしが喜んでこれに応じたのは、旧版の

編集委員会に名をつらねながら、ほとんど何もできなかったことに対する償いの気持があったからである。新版は旧版に較べて、はるかに多くの文章を収載したほか、英文著述の大部分を含め、またテキストの校合や印刷校正その他の点においても厳密を期した。しかし同時に新版は旧版に負うところ多いことはいうまでもなく、その意味で戦争直後の困難な時期に旧版の編集、出版に当たられた方々の御苦労に対し、ここに深い感謝の意を表する。

一九七一年一月

岩村　忍

凡例

一、本全集は、南方熊楠が公表した論考、随筆、英文著述、ならびに未公表の論考、手稿類などを集大成することを期した。したがって生前刊行された『南方閑話』『南方随筆』『続南方随筆』の三冊の単行本、および死後刊行された乾元社版『南方熊楠全集』に比し、以下の諸方針により、大幅に増補されている。

1. 国内で、著書として、あるいは雑誌に発表された文章は、内容がはなはだしく重複する一、二の例外を除き、すべて収録する。また新聞に掲載された文章も、主要なものは収録する。
2. 外国の刊行物に発表された英文著述および未公表の英文論考の主要なものは原文で収録する。その校訂には監修者の一人である岩村忍が当たる。
3. 書簡は、学術的および伝記的に重要な内容をもつものを、入手しうる限り、完全な形で収録する。
4. その他、未公表の論考、手稿類、日記の一部、年譜、著述目録索引を付載する。
5. 以上の諸資料のほとんどは南方家に所蔵されていたもので、それらの整理には監修者の一人である岡本清造が当たる。

二、表記は原則として「現代かなづかい」に改め、送りがなも（有た→あった　名く→名づく　息ず→息まず　などのように）読解の便をはかって付加し、大部分の接続詞、副詞、助詞なども、漢字をかな書きに改めた。また、カタカナ・漢字混交文は、特殊な植物学論文（横書き）を除き、ひらがな・漢字混交文に改めた。

三、漢字は、当用漢字、同補正案、人名用別表にある字体は、これを使用し、また一部の俗字、同字などで現在常用されないものは、通用のものに改めた（恠→怪　耻→恥　咀→詛　など）。ただ、著者独特の書きぐせである用字、用語は、肉筆手簡、初出雑誌などと校合のうえ、残したものが少なくない（たとえば愛憎（愛想）、居多（許多）などの用語はそのまま残し、臆と憶、希と稀、注と註の混用などはあえて統一しない）。

四、引用文は、著者が内容をとって略述し、あるいは書き改めたと思われる場合を除き、可能な限り原典と照合、校訂した。また漢文の引用文は「読み下し文」に改め、この部分は、一般の「　」に対し小さい「　」で区別した。読み下しには飯倉照平が当たり、監修者の一人である入矢義高が校閲した。

五、外国人名・地名などの固有名詞および若干の普通名詞で、現在常用されない漢字表記は、カタカナに改めた。ただし、初出にルビを付した出典名は漢字表記のままとした。また、これらの出典の訳名および当初からのカタカナ表記は論文によってかなり異同があるが、これらは少数の例外を除いて、同一論文内で統一するにとどめた。なお、ヂ→ジ　ヅ→ズ　などの書き改めは行なった。

六、書名および雑誌名には『　』、論文名には「　」を付し、欧文では、著者が多く用いた方式に従い、書名は“　”論文名は‘　’に統一した。なお巻号数、頁数を表わす漢数字は、十方式を用いず一〇方式とした。

七、ルビは、既刊文献にあって著者独特の読みぐせと思われるものは、これを生かし、さらに一般の難読語にも、なるべくルビをつけた。句読点、改行、字下り、小字の扱いなどは、読解の便をはかってあらたに整理した。

八、既刊文献における削除部分、欠字および伏字は、可能な限り復原した。なお、原典の欠字と判明したものは□□、復原不可能の箇所は××で残した。

九、本文中の校注補訂は〔　〕をもって示し、著者の手沢本・手沢雑誌における書き込みを本文中に挿入した場合は、〔著者書きこみ〕と特記した。また、各論文の発表または執筆年月日、掲載雑誌または新聞名、巻号数は、文章の末尾に付記

した。以上の諸校訂には飯倉照平が当たった。なお、特に必要な場合には、使用したテキストに関し、論文の末尾に注記を付した。

本書（第一巻）には、普通「十二支考」と呼ばれている一一篇の論考を収録した。

「虎に関する史話と伝説、民俗」から「猪に関する民俗と伝説」に至る一〇篇は、大正三年から十二年にかけて、博文館発行の雑誌『太陽』に掲載された。論考によって長短があり、著者も「子丑の二年は全く出でおらず、未申酉戌亥の分はいずれも尻きれとんぼ」と述べているように、未完と思われるものも含まれているが、やはり南方熊楠の主著たるを失わない。以上の一〇篇については、著者手沢の初出雑誌と乾元社版『南方熊楠全集』第一、二巻を対校してテキストとした。挿図（九九点）は初出雑誌からすべて復原したが、写真は不鮮明なため割愛した。ただし、その旨は該当する箇所に注記した。

「鼠に関する民俗と信念」は『太陽』に掲載されなかったもので、テキストには、主として著者草稿（雑賀貞次郎氏浄写）を用いた。詳細な経緯については、その末尾の注記を参照されたい。なお「牛」に関する論考はついに執筆されなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

南方熊楠全集の刊行にあたって
凡　例
十二支考
虎に関する史話と伝説、民俗……5
一　名義のこと 5　二　虎の記載概略 7　三　虎と人や他の獣との関係 11
四　史話 18　五　仏教譚 28　六　虎に関する信念 48　七　虎に関する民俗 56
兎に関する民俗と伝説……65
田原藤太竜宮入りの譚……83
一　話の本文 83　二　竜とは何ぞ 98　三　竜の起原と発達（1） 120　四　竜の起原と発達（2） 133　五　本話の出処系統 143
蛇に関する民俗と伝説……159
一　名義 160　二　産地 164　三　身の大きさ 166　四　蛇の特質 167　五　蛇と方術 173
六　蛇の魅力 181　七　蛇と財宝 186　八　異様なる蛇ども 191　九　蛇の足 200
十　蛇の変化 207　十一　蛇の効用 219

馬に関する民俗と伝説……223
一　伝説（1）223　二　伝説（2）239　三　名称249　四　種類255　五　性質262
六　心理274　七　民俗（1）290　八　民俗（2）297　九　民俗（3）307
羊に関する民俗と伝説……327
猴に関する民俗と伝説……339
一　概言（1）339　二　概言（2）355　三　性質361　四　民俗（1）374
五　民俗（2）385
鶏に関する民俗と伝説……417
一　伝説（1）417　二　伝説（2）427　三　伝説（3）439　四　伝説（4）453
五　伝説（5）470　六　概説476
犬に関する民俗と伝説……491
猪に関する民俗と伝説……525
鼠に関する民俗と信念……569
南方学の系譜……金　関　丈　夫……611

南方熊楠全集　第一巻

十二支考

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com